おおさか KEYわーど 第1回

花、花、花でチントンシャン…

幕末の錦絵のなかへお花見ツアー

『澱川両岸一覧』より「川崎桜宮」　大阪歴史博物館蔵

大阪は“花の都”であると言うと「そんなアホな」と思われるだろうか。フィレンツェやパリが、文化芸術の香り高い“花の都”と謳われたのと同じ意味ではなく、確かに少しは脚色しているが、字のままに百花繚乱、「美しい花々が咲きほこる」という意味で大阪は“花の都”であった。

幕末の大坂で刊行された『浪花百景』という錦絵の揃い物がある（江戸時代を指すときは「大坂」の字を用いる）。一養斎芳瀧、南粋亭芳雪、一珠斎国員という三人の浮世絵師が分担して当時の大坂名所を百枚の浮世絵に描き、北浜の「石和」という板元から発行された。これを眺めていて案外と大坂に“花の名所”があることに気づいた。

『浪花百景』には「うらえ杜若」「野田藤」「吉助牡丹盛り」など名物の花がタイトルの作品があるし、梅は「梅やしき」、桃花なら「野中観音桃華盛り」「産湯味原池」もある。今の季節であれば「新町廓中九軒夜桜」など、満開の桜を描いた何点かに目がいきやすいかもしれない。

『浪花百景』に数点ある桜の絵でも、私は「さくらの宮景」（表紙掲載）が好きだ。桜之宮はいうまでもなく花見の名所だが、画面中央、対岸に見えるのが、名の由来となる「櫻宮」のお社と鳥居であり、川べりに花見の貸席がずらりと並び、屋形船も出ている。その状況は上図の『澱川両岸一覧』（1861年）にも描かれており、「このまえ私らが帰りに行った所とちがうのん」と錯覚してしまうほど、まるで現代と同じように花見客が出て、出店が並んでいる。

「さくらの宮景」で面白いのが屋形船である。お揃いのサクラ模様の浴衣に、黄色の手ぬぐいを首に巻いたご一党さんが乗り込み、船縁に腰掛け、シャカシャン、ピーヒャラと三味線や笛やらにぎやかに愉しんでいる。三味線は三人。浴衣は料亭や船宿のものか。桜花の模様が小学校の校章を思わせ、なにやら懐かしい気分もする。卓上にならぶ焼鯛と豆?の鉢。鯛はすでに箸がつき半身である。ご機嫌さんで唄う兄さんの腰掛ける脇にも、お猪口とお手塩（取り皿）がある。よろしいなあ。長閑な春日の光景。

「櫻宮」が現在地に造営されたのが宝暦6年（1756）のこと。社名にちなんで桜を植え、付近の大川一帯も桜の名所となった。落語の「貧乏花見」「百年目」の舞台でもある。明治時代に水害にあったが、桜並木の公園として再整備され、造幣局の通り抜けともども大阪最大の花見スポットとなった。建築家の安藤忠雄氏らを発起人に、平成16年から毛馬桜之宮公園から中之島公園を結ぶルートを「桜の会・平成の通り抜け」と名付けて寄付金を募り、新たな桜の植樹事業も進められた。

「おおさかKEYわーど」と題したこの連載は、「大阪を知るための100の言葉とモノの世界」の副題のように、わが街・大阪を様々な言葉や人物、絵画、文学、その他資料から掘り下げていこうという企画である。口開けとなる今回は、幕末の『浪花百景』から「平成の通り抜け」へと時代を飛び越えて、華やかに大阪を“花の都”と呼んでみた。なに?それは褒めすぎ、花見酒が抜けていないって?――いやいや、ちょうど20年前に大阪では「花博」が開かれたし、“浪花”という単語にも“花”が入っていることをお忘れなく。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館教授／大学院文学研究科（兼任）。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。